

第八 フランス通信

第八 フランス通信

瀧澤敬

著

昭和二十五年八月十五日 印刷
昭和二十五年八月二十日 第一刷發行

第八フランス通信

定價貳百圓

著者 瀧澤 敬一

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波 雄二郎

印刷者 東京都西多摩郡震村根ケ布三八五番地
山田 一雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

株式會社大化堂印刷・製本

目次

「相續の粉末」“La poudre de succession”	一
山莊のうぐひす	四
日佛どちらが住みよいか	六
國民早老研究會議	三
ふしぎな國	五
ペタン元帥釋放委員會	九
國際見本市シーズン	四
元帥杖か信認狀か	七
フランス語版リーダーズ・ダイジェスト	三
アンタント・コルデアル	三
世はさかさま	六

大裁判	四二
科學的なルール下の奇蹟	四四
先生の勞働爭議	四六
三段跳の國際絹業會議	五一
モンブランのトンネル	五七
お札の洪水	六〇
「トラブル」は trouble に非ず	六五
新バベルの塔	六七
フランセ・モアヤン（典型フランス人）	七二
鐘の双音	七九
死ぬか、腐るか	八三
フランス人は不道德か	八八
百姓と牛肉	九三
新年とキツス	九七

フランス政界の三辣み	一〇三
日本語を教へる	一〇九
「リラ」へ憧れる心	一一五
七面鳥の値段	一二九
たけのこ研究室	一二四
椰子主義と隻脚主義	一三〇
フランス女禮讃	一三四
パレー・ブルボンの客	一四三
學生生活の今日	一四九
手紙とペン	一五五
少年のない國	一五九
バタがらくに買へる日	一六三
鐵の扉の西東	一七三
老人國と自由	一七八

Noël 1948 (クリスマス千九百四十八年)	一八三
一寒村の記	一八七
女房獨語	一九五
ラデオ雑想	二〇一
目に見えない労働	二〇六
天國旅行案内人	二〇九
寄せては返す赤い波	二二三
謝恩列車	二二八
赤新聞	二三〇
私の祝日	二三三
目と耳の和解	二三五
アヴェ・マリヤ	二四九
子寶の國	二五五
紙上に金額を拾ふ	二五九

婦人流行遠望	二四三
フランス人の夢	二四八
日本ばかり	二五四
戦争のたまもの	二五八
「悪の華」餘燼	二六一
「母の日」「翁の日」	二六七
年金コンプレックス	二七二
「ル・グラン・シルク」をよむ	二七六
女言葉	二八二
食膳デモクラシー	二八六
女學生の夢	二九一
観光と休暇	二九八
アルス巡禮の記	三〇五
「オールドーヴル・ヴァリエ」	三二六

目次

六

あとがき

三三

さしゑ・瀧澤マドレーヌ

「相續の粉末」“La poudre de succession”

ラ・ブードル・ド・シュクセションの譯語である。十六世紀の初めイタリアにボルジャと呼ぶ豪族があつて、同族間の邪魔者を相續の粉末でどし／＼片づけ、毒殺流行の時代があつた。ユーゴの「リュクレチヤ・ボルジャ」はその暗黒面を畫いたものだ。フランス犯罪學の權威ドクトル・ロカールの話ではこの毒藥は蛙に砒素をのませ日干しにしてつき碎いたもの、その當時では甚だ有效な毒素であつたが、今では不幸にしてもつと氣のきいた品物が澤山あるさうである。中國の鴉毒といふのは雉に似て毒を持つた鳥の羽根を酒にひたして作つたものだといふ。西洋のは前から用意はせず、仕掛けのある指環に藥をかくし酒をすゝめる時にうまく盃に落ち込む様にしたものらしい。これならば大威張りで毒味が出来る。

帝銀毒殺事件が迷宮に入つてこんなことも思ひ出したのだが、以前淺草で小學教員を喫茶店に誘ひ、青酸一滴で盛り殺し、どさくさまぎれに大金入りのカバンを奪つたものがあつた。この犯

人はすぐ捕まり無期懲役に服して居ると思ふ。ずつと遡り、横濱で一薬局生が解熱劑のキニーネとストリキニーネを間違へ、少年を殺したことがある。醫者と病家とは親戚關係もあり、この大過失は裁判沙汰にはならなかつたが、責任も知識もない薬局員に調劑をさせる制度が現存するならば、不正不良賣藥と相まつていかにもあぶないことだ。

千九百四十七年あたりからフランスに毒殺であらうといふ變死事件がちよい／＼あつて、ボルジャ時代がまた來たと新聞はかき立てた。ディジョン市病院で二十何人かの妊婦が變死し、毒殺の嫌疑が醫者や看護婦にかゝり、パリから法醫學の權威警察吏裁判官が乗り込み、數ヶ月かゝつて調べたけれども何の證據もあがらず、謎のまゝうやむやに終つた。人間の命には現代科學のまだ窺ひ得られぬ神祕境がある。それから暫くは病院で死ぬと、屍の様なことまで毒殺だと騒いだものだ。徒らに醫學界に不信任を投げかけるのは社會問題として面白くない。

近頃邪魔になる亭主を片づける爲に、一服盛つた農家の浮氣女房があつた。これに似た例はあまり珍らしくないらしい。農産物中じやがいにも大害をするコロラド甲蟲退治には普通に砒酸鉛を用ゐ、これは誰にでもわけなく買へるからこんなものを飲ませるらしい。山莊の近くに住む六十五になる醫者が若い後家と再婚した。奥さんは年上、先方の主人は半身不隨であつたのだが、

それが都合よく双方とも同じ時分に死んでしまつたのだから、世間の狭い田舎では桑原々と首をちぢめる百姓もある。まさかそんなこともあるまいが。

心中に蛙の粉末をかくし持つ人間はどここの國にも澤山ある。科學も司法權も及ばないから厄介だ。

(一九四八・四・二一)

山莊のうぐひす

夜なく鳥だからナイチンゲール (nightingale) といふ。フランス語にするとロッシニョル (Rossignol) で、そんな意味はなくなるが、やはり夜も遅くなつてよくなくものらしい。カルタなどに夜更しをしてから、森まで出かけたが、聞かれなかつたといふ記事を、日本人の歐洲見聞記で一二度よんだことがある。私も今まで西洋うぐひすの啼音などは知らなかつた。

處がローマ放送局の呼出符號は「うぐひすのなくね」であるのに氣づき、又ベートーヴェンの第六シンフォニー即ち田園交響樂のなかにそのなき聲をまねた一節があるのを知つてレコードを廻して見た。シャトーブリヤンはイタリヤの旅でティベル河畔にうぐひすをきき、その啼音を音樂的に分析し、わが身につまされ戀のさゝやきとした一節がある。ローマ放送局がこの鳥のなくねを呼出符號にしたのはこんな文學的意味があるものかどうか。梅にとまつてホーホケキョーと心得て居る私にはあんまり似て居ると思はれないが、どうせ遠國から飛んでくる小鳥故、ヨ

ロツパ流にさへづるのであらう。少女時代數年の夏を私の山莊に暮した婦人が、昔お宅ではよく驚がなきましたと言ふけれども、主人公は三十年來一度も聞いたことはなかつたのである。

春が大分早目に來た千九百四十八年四月中旬の數日を山莊に過した。ライラックの香が窓から流れ込む、暖くてよい月夜であつた。十一時頃ねて居るとうぐひすがないて居ますと、娘が言ふので皆きくために起きた。やはりホーホケキョーの身内で鳥はすぐそばの杉杜に居たらしい。次の晩も月がよかつたので待ち構へて居ると隣の庭に移つてしまつた。三晩目は雲がかゝつたが、ねる前庭に出て見たら遠い谷間から蟲の音や犬の遠吠にまじりかすかに聞え、耳の早い妻はやはりうぐひすだと主張したが、私にはもうはつきりしなかつた。

ともかくもうぐひすの初音をきいたのが嬉しくて、翌日隣の百姓の婆さんに話したらば、巢を作る時分の戀歌ですよ、月夜には一番よく浮かれるのでせうが、此邊では晝間だつてなきますといふ。日本のうぐひすを口笛でまねてきかせたらば笑つて居た。聯想で急にうぐひす餅がたべたくなつた。故郷の春にそむくことも随分年久しいなと思つたりした。

フランスの童謡「ロツシニヨレ・デュ・ボア」森のうぐひすを歌ひながら書齋に歸つた。

日佛どちらが住みよいか

一休和尚が攝津の住吉を通つたとき葬式があつて皆泣いて居るのを見て

「來て見ればこゝも火宅の宿なれや

なぜすみよしと人のいふらん」

と詠んだ。いくら住吉の里だとても涙のあることは昔も今も變りはあるまい。

丈夫な時には肺や胃のあることを思ひ出しもしないものである。内臓があるなと氣のつくのは病氣にかゝつてからの話、天下泰平でのんびり暮して居られるときには自分の居る國が住みよいか悪いかなどと考へはしないものだ。戦争でひどい目に逢つたからこそ、どこが住みよい國かしらんと比べる氣にもなるのであつて、これは世界中が大病になつて居るしるしである。

大天國の北アメリカ、小天國のスイス、スウェーデンなどは考へるのも癪だからこゝには言はない。生れ故郷の東京と長くすむフランスとどちらが住みよい國かと考へる様になつたのは戦後

近年のことである。

私共がタクワン帝國の尊稱を奉つて居た大日本の文化はひどくびつこであつたから、あんなにたゞきのめされては當分望みはないといふ見方もあるし、又反對に廣い世界を見渡せば下には下があるもので日本などはよい方だから行く先に希望も光明もあるとの説もきいて居る。

ガラップ輿論調査によると、フランスは住み心地の悪い國となつて居るが、これはパラダイスから見下したからであつて、本國人は必しもさうは思つて居ない。尤も自國にあいそをつかして外國移住の夢を見る人間はこの國にもあつて、そのトップは現在のドイツ、殆ど半數は出たがつて居る。一番落ちついて居るのは北アメリカ人で、五パーセントに過ぎないと云ふ。これを日本に持つて行つたらどんな割合になるか。風俗習慣言語があまりかけはなれて居ない歐米諸國間とは様子も違ふけれども、氣候は學校で教へられたほどよくはなし、食物の不足する今日では出来ることなら移住したいと願ふ青年は相應に澤山居やしまいかと思ふ。しかしえんまさんには地獄が一番よからうし、これは銘々の境遇にもよるし、又心持や比較の問題だから本國人と外國人ではよほど違つてくる。明治時代に東京を去つた私はフランスが随分長いけれどもフランス人ほど住みよい國と思へないのは當り前であらう。

フランスに居た友達は同じ金があるならば日本の方がよいと言つたものであるが、今ではどうかしらん。「わが英國では」とよく口をすべらした日本人がある。なぜ日本人なんかに生れて來たのかと愚痴をこぼした人も知つて居る。パリの大學都市に五十萬圓の日本學生會館を寄附し、東京の自宅にはフランス名前をつけ、戦争になつてからフランス人と一緒に苦勞するのだと言つてわざ／＼渡佛した金持は、きつと死ぬまでパリの生活がしたかつたのであらうが、不幸にも今は日本に歸つて居る。

私は西洋ねまきでねることもなし、毎日醬油をなめて居る位ではあるが、日本には家も金も職業も持たぬからであらう、東京に行つて同胞と苦樂をわかちたいとまでは思はない。二度ばかり一寸歸朝した時の印象では、暑さ寒さがひどく身にしみ、だゞつ廣い東京がちつとも廣々とした感じを與へず、鉛筆の様なごちゃ／＼した電柱が目ざはりになり、肥牽きの百姓や、巡查や兵隊がむやみに居て、子供には天國、女子には地獄、下駄音楽がやかましく、時間は守らず、人の口がいやにうるさい國であつた。すりの用心火の用心、泥棒に傳染病に、外出しても家に居ても安心して居られない様な氣がした。

しかしこれはフランスに馴れてからの話であるし、又外國のツーリスト而も日光京都奈良箱根